

Title	クルト・ヴァイス『マラルメ：詩・格言・振舞い』(1)(翻訳)
Sub Title	Kurt Wais : Mallarmé Dichtung–Weisheit–Haltung (1) (traduction)
Author	原山, 重信(Harayama, Shigenobu)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2017
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.64 (2017. 3) ,p.85- 91
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20170331-0085">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20170331-0085</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# クルト・ヴァイス

## 『マラルメ——詩・格言・振舞い』(1) (翻訳)

原山重信 訳

### 序文

そこでは英雄と詩人が「秘密」を保持していた、  
 ヴィリエはおのれを玉座にふさわしい者とし、  
 ヴェルレーヌは頹廢と贖罪のうちで敬謙に無邪気に  
 そしておのれの心象のために血を流す マラルメ。  
 シュテファン・ゲオルゲ「フランス人」『第七の輪』  
 (富岡近雄 訳)<sup>1)</sup>

19世紀ヨーロッパ文学は、概観できるようになり始めている。真価を認められないものたちにその正当性が生じ、過大評価されたものは控えめな注目に甘んじなければならない。この世紀が、前の諸世紀と全く同様に、固有の世界文学的課題を果たしたということが、同程度に予感されうる。この特色を認めるためには、異種のものの中に見るべき共通のものが問題である。19世紀の詩は、18世紀のそれよりも「写実主義的」であるという、人が最もしばしば出会う区別はあまり述べられない。

恐らくこの著作が貫く赤い糸として、詩作品の新しい理解のような何かを断言することができる。ステファヌ・マラルメの位置を理解するためには、当時の芸術理解の幾つかの連関を明らかにすることが望ましいだろう。簡潔なスケッチだけで十分であるに違いない。

ルネサンスの徳信仰から、イギリスの博愛主義者とルソーの、良き熱狂的

な人間の魂への信頼がいかにして生じたのかはよく知られている。同じ基礎の上にドイツの観念論的な思想家の道德上の楽天主義が生じたのである。その文学上の諸影響は全く 19 世紀の物語芸術と演劇を支配し、それらは 20 世紀にも恐らく消えることはないであろう。にも拘らず何か或る別の運動も、浅薄なものになることに対して、同様に不死身ではない。しばしばそれはユートピア的、センチメンタルなものに陥った。進歩の期待と自由主義的な神学が、心理的な明敏さの、古代ヨーロッパの遺産の上へ、存在の悲劇的な熟考の上へ、貧しくなりつつ作用した。それ故至る所で偏りは正さなければならなかった。異議申し立ての最も早い波からのみ、ここでは話が来なければならない。ドイツとフランスの波から。まず第一に、ゲーテの〈ウェルテル〉は、天才的で魔術的に性格を統御された人間の典型を、彼の悩みの中に示した。シャトーブリアン、バイロンと他の無数の人々が、それによって悲劇的な世界観への勇気を出した。シラーの方は、調和のとれた真の人間の「途方もなく大きな裂け目」を、階級のギャップを通して、自己から遠ざけられた歴史的に同時代の人々に対して、悲劇的かつ劇的に掴んだ。当時人文主義における現代の悲劇詩が起った。

(以上、原著 1-2 頁途中まで)

(以下、〈Triptique〉注解、556-568 頁)

彼はまた、「多くの豊かな、しかしあまり重要でなくなった戦利品の相続人」が自分の産みの親たちに対してどのように振舞ったか、というテーマについて、長い間一つの詩を構想していた。1880 年頃には彼はとにかく約千行からなる韻文抒情詩を意図していた。そのテーマは何か。将来息子となるべき胚が、まだ生まれる以前に、ある女性と結婚しようという彼の親の目論見に警告して反抗する。この核心において、我々は『骰子一擲』の中で述べられた英雄の生涯——その英雄は「予感すること」の宿命的な結びつきによって、セイレネスと共に生み出された——を見抜くと信じる。ジョージ・ムーアが長い時間が経った後で、マラルメの発言から思い出したことは、ただ断片的な価値しかもっていない。すなわち、「ある男が一人の女を愛し、

彼女と結婚することに決めるところが、この男の中にある胚——つまり「潜在的」子供——は、彼の「潜在的」母親が彼女の純潔を失うだろう、という思いに打ちのめされて、その男（自分の父親）にこの結婚を諦めさせるべく努力する<sup>2)</sup>。Iの2行目で知らされた父親を縛る息子の束縛に対する反抗と、(Ⅲにおける)母への憧憬とが、三部作の真ん中に位置する *Surgi* のソネを形作っている。

ここでは、男女の抱擁なしに生まれた者、口付けなしに生まれなかった者——決して満たされなかったある官能性の象徴であり、誰も相続人イジチュールによってよりも多く生きなかったところの人生の象徴——が語る。彼は、自分はシルフであると名乗り、或いは自分をシルフと比する。ひょっとしたら、この詩の着想は、「nameless elf, / That haunteth the lone regions where hath trod / No foot of man!」(*Silence*) というポーの詩、あるいはそのマラルメによる翻訳「son ombre, elle innommée, qui, elle, hante les régions isolées que n'a foulées nul pied d'homme」に由来する。誇らかに、——そして文脈によってそう解釈して差し支えないであろうように——勝ち誇って、彼は自分がキマイラに護衛された両親の生殖のもくろみを打ち砕いたことを誇るのだ。父親に対する軽蔑的な言及は、我々が *Parce que de la viande* によって知っているマラルメの最も秘められた観念の一つを思い起こさせる。生き生きしたバラにも比すべき生殖の口付けは成就していない。誇りに満ちて（ハムレットとイジチュールの如く *ne consent* 「認めない」）、シルフは自らの内に汚れなき死の口付けを肯定する。又もや〈agoniser [死に瀕している]〉(*Ses purs*) と〈désaveu「否定」〉(*Tout orgueil*) の心の中で。

壊れやすい花瓶<sup>3)</sup>の膨らんだ膨張から高く弓形に盛り上がり、暗闇の中に消え失せ、その花瓶の首は、急に、花の中にはなくて、非存在の中に、王冠で飾った情熱の花の無いことの中に終わる。——その花が口付けのように咲くことが、辛さの寝ずの番を貫き通すことができただろう。そしてこの自ら望まれ、積極的になされた (*s'interrompt* 「中断する」) 断念は、シルフ——彼は創造されずに、熱のない部屋の裸のはりにかかっている——のささやきの中に敵対行為を見出す。その体が私を産むかもしれない女と、彼女の

愛人であり私を作るかもしれない男（心地よい調子だ！）、その二人は会合していない！ 断じて彼らの唇<sup>4)</sup>は口付けのバラの花を形作ってはいないし、一度も二人は同じ幻想<sup>5)</sup>の杯から飲んでいなかった。孕みの口付けに対する反抗は、熱心な意志の企てから操縦された花瓶の膨らみの反抗に対応している。しかしその花瓶の首は「注目されず」、その計り知れず、底知れない寡婦の空虚と同様、収容されるべき他の何の内容物もなく、その花瓶には、そこからバラ——すなわち生殖のための死の口付け——を育たせるどんな小さな可能性も残ってはいない。

この両方の夜のソネは、*Ses purs ongles* と *À la nue* のように、『イジチュール』と『骰子一擲』のように、否認の、ハムレットの何もしないことの賞賛のために書かれている。このことは、緊迫した周囲の世界に屈することや、その謎の解答を述べることよりもむしろ、将来の利己的な生殖によらずに取り止められた全く自分自身の死の方を選ぶ。この生まれてこないこと——たとえそれが英雄的なことだとしても——以外の他の可能性はあり得なかったのか。それに対する解答は、件の英雄的な夜から或る故人の黎明に到る展望である——*Une dentelle* という哀歌的なソネ。このソネの前半では、我々が既に知っていることが繰り返される。「高級な遊戯」の結末への疑いが静まる。懸念された生殖は実現しなかった（それに関しては、その生殖をまさに自我の埋葬 *ensevelir* と解さなければならないということが、マラルメの *Surgi* の読解を前提としている）。何故ならば、*Surgi* において口付けによって暗示されているものは、今やベッドによって表現されているからだ。

## 注

- 1) 『ゲオルゲ全詩集』訳・注・評伝 富岡近雄、郁文堂刊、1994年、p.162.
- 2) Moore, George : « Mes souvenirs sur Mallarmé », in *Figaro*, le 13 octobre 1923 ; *Avowals*, London, 1924, p.263.
- 3) ホフマンの『荒ら家』における「とても変わった形をした水晶面」或いは目に見えない生き生きとした面を参照。それをボードレールは、廃屋の古い戸棚の中に見出す。「幾千もの思考が、不吉な蛹となって、この闇の中でそっと震え

ながら眠っていた」(「小瓶」)。

- 4) マラルメのシルフ、キス、唇と薔薇の結合の関しては、ナウマンによって、6つの使用例 (Naumann, Walter : *Der Sprachgebrauch Mallarmés*, Marburg : Lahn, 1936, p.20 以下)、そのうち2つは、モーロンによっても指摘されている (Mallarmé, Stéphane : *Poems*. Translated by Roger Fry. Introduction and commentary by Charles Mauron. London : Chatto and Windus, 1936, p.257.)。モークレールの『死者たちの太陽』(p.83)における彼の肖像を、ここで我われが真正なものともみなすならば、マラルメは、彼自身の娘を自分のシルフと呼んだのだろうか。シルフに関しては、ユゴー、デュマによる使用例、その他がある (Baldensperger, F. : *Goethe en France*, 1920, p.119.)。バンヴィル、マンデス、ディエルクスの使用例 (Wais : *Mallarmé*, 注, p.409.)。
- 5) スーラは (Soula, Camille : *La Poésie et la pensée de Stéphane Mallarmé. Essai sur l'hermétisme mallarméen*, Paris : Edouard Champion, 1926, p.76.; 及びナウマン前掲書, p.36.)、花瓶とコップをシメールと同様の象徴とみなす。同書, pp.124, 432 参照。ここでは、「シメールの豊かな源泉」(ウイゼワと全ての注釈者)に倣って、決して不毛な詩人の嘆きに関わる問題ではない。したがって「あらゆる喜びのやもめ暮らし」(Paladini, L. : *Interpretazione di Mallarmé : poesie e prose*. Ancona : La Lucerna, 1928, p.14.)でもない。ジャンゲーは、完全に、詩人よりももっと巫女的で、シメールについて「これらの恋人たちは、〈精神〉を知らない」(Gengoux, Jacques : *Le Symbolisme de Mallarmé*. Paris : Nizet, 1950, p.190.)と解する。この3つの夜の歌は、彼にとって愛の歌である。本当は、特に Surgi は、我慢した不安の軽減された歌である。

## 訳者後記

ここにサンプルとして訳出した文章は、Kurt Wais : *Mallarmé Dichtung – Weisheit – Haltung*, München : C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, 1952 の「序文」の1-2頁の途中まで、並びにマラルメの詩集に収められた、所謂〈Triptique〉(三部作)の註解、566-568頁の途中までの部分である。

読者として念頭にあるのは、日本においてマラルメを研究している人達であって、広く一般の人ではない。このことが、敢えてドイツ語で書かれたこの大論文を、フランス文学が専門であって、しかも必ずしもドイツ語が堪能

とは言えない私が訳して紹介しようとする狙いに根拠を与えてくれるものである。即ち外国語で書かれた文章を翻訳しようという場合、その言語を得手とする訳者が幅広い一般の読者を想定して啓蒙的意図の下に行われるのが常であるのかもしれないが、ここではこうした通例と聊か事情を異にする。私は1990年より断続的に1998年（詩人の没後100年）までマラルメが外国語に翻訳された文献をリスト・アップする作業に取り組んできたが、そもそもこの「翻訳文献書誌」の発想の元になったのはクルト・ヴァイスの上記著作の巻末に付せられた綿密な書誌の存在であった。この大著は800頁にも及び、且つドイツ語で書かれているために、マラルメ研究の古典的著作としてアンリ・モンドールによる伝記と並んで必須の文献であるにも拘らず、特に日本では通読された形跡はない。モンドールの伝記も訳されるべき文献であったが、現在では資料的な誤りが指摘され、何よりもフランス語で書かれているため日本におけるフランス文学の研究者にも比較的容易に読めるものであることもあって、終ぞ日本語訳が陽の目を見るタイミングを失ってしまった。それでも支障がないのは、原文のままに読めるからであるし、現に今でも時折り引用されることがある。だが、クルト・ヴァイスの場合はというと、聊かアナクロニズム的ではあるが、これを通読して紹介しているマラルメ研究者が日本にはいない以上、これに取り組む必要性は失われていないと言っても大過ないであろう。残念ながら我が国のフランス文学研究の世界では、中世文学や言語学、哲学・思想関係の研究者の一部を除いて、一般にフランス語、英語、日本語以外の研究文献を読むという習慣がないようだ。これは特にマラルメ研究に限って言えば、本国のそれをも凌駕すると言ってよいほどのレヴェルにありながら、誠に残念なことだと言わなければならない。そこで、こうした習慣に異を唱える意味からも、この文献を少しずつ訳して紹介していくことは意味があることだと考えた。

私とドイツ語との付き合いは、慶應義塾大学に提出した修士論文において、マラルメの「エロディアド」を取り上げた際に、その源泉の一つとされるハイネの『アッタ・トロル』をレクラム文庫版で通読してその検証を試みて以来のことで何分心許ないが、書誌が一応の完成を見た（1998年以降は、

諸般の事情で、この種の作業を後輩の研究者たちに委ねることにした) 後には、是非とも取り組まなければならない課題として前々から私の脳裏を離れなかった。こうした経緯から、ともかく翻訳の作業をスタートすることにした。最初はドイツ語を思い出しながらの作業になるので、真に牛のごとき歩みになることはお赦し賜りたい。こんな調子だと私の存命中に完成するのだろうかと思われる向きもあるだろうが、然るべき環境が整った暁にはスピードを上げようと考えている。そして、或る程度のところまで進んだ段階で単行本の形にする手立てが見つかることを期待しているが、叶わぬ時は関係各位に限定という形で原稿の印刷を配布できればよいとも考えている。ここに訳出した断片は全くのサンプルに過ぎない。当初は30ページほどある「序文」をまず片付けようという計画であったが、何分訳者がドイツ語の専門家でないばかりか、久し振りの試みであったため、作業は遅々として進まなかった。語学的な面だけでなく、内容についても、ドイツ文学の事象が頻出する本書は、流石に幾多の秀才のチャレンジをも退けるのに十分な難解さを孕んでいるということを改めて痛感した。そこで、これを補うのに、訳者が1984～1985年当時慶応義塾大学ドイツ文学科の学生であった横瀬浩氏の助力を仰ぎながら日仏学院における渡辺守章先生のマラルメ詩を読む演習に備えて訳出した旧稿に手を加えて公にすることにした。「序文」の一般性と註解の具体性がこの大著の多面性、奥の深さを知らしめ、全体を訳出するという趣旨に賛同の声が上がることを願って止まない。